

「西遊記と凡事徹底と高倉健」の関係



皆様、ご無沙汰しております。久しぶりに映画を見てきました。中国版「西遊記」です。ユーモアたっぷりでスケールの大きいファンタジーで突然、柔道一直線やGメン75の音楽を挟み込んできたりして、かなり昭和の日本人を笑いのツボにはめてくる監督さんです。。。もう最高なんですが、やはり子供の時に見ていた堺正章、西田敏行、岸部シロー、夏目雅子の日本版「西遊記」の大ファンで、日本版「西遊記」は孫悟空(怒り)、猪八戒(貪り)、沙悟浄(利己主義)、玄奘(仏性)を持つ一人の人間の内面世界の自己成長の旅路なんです。孫悟空の頭にはまっている金の輪も実は「理性の痛み」であり、本能のままに突っ走ることを制御された状態で経典を持ち帰る(道を究める)旅路なんです。そこがいいんです。。(どうぞ自己成長バカと呼んでください！笑)

西遊記は禅の十牛図にも似ていますが、我々の工事現場にも似ています。

我々が本能のままに作業をすると、すぐにUFOが出現します。未確認飛行物体ではなく、「油断」、「不注意」、「横着」のことで。したがってそれを制御する「理性の痛み」が必要になります。弊社ではコレです。



ヘルメットに「凡事徹底」と刻む。これがテクアの悟空の金輪です。

これは本当に痛いです。作業に時間と余裕があるときはいいのですが、時間も押して、作業も進まず、体力的にもへばってくると、たちまち4Sのレベルが落ち、足元に工具が散乱してきます。「まあこんなもんでいいか〜」と自分に妥協を始めます。

するとそれを理性が観ていて「おいおい、それでよくヘルメットに恥ずかしげもなく凡事徹底と記したな！」と痛い突っ込みを入れてきます。「くそ〜」と思いながら何とか自分を立て直し、足元に散らかりまくった工具を整え、気持ちも整え、なんとか現場を仕上げ、後片付けして家路に帰ります。天竺への道(凡事徹底)にはまだまだほど遠いフラフラな、道半ばの毎日です。

この道をフラフラせずに見事に歩き切ったのが高倉健さんです。徹底的に俳優 高倉健であり続けました。映画館で観客が見つめる憧れのまなざしのそのままに、観客の夢を壊さないことを徹底的に一生やり続けたことは、家路に帰れば解放される我々の工事現場とは凡事徹底のレベルが違います。

もちろん健さんも最初からそんな人ではなく、生活の為に、お金の為に俳優という仕事に就いたと語られています。そして最初のころは人見知りであまりの内向さ加減と木偶の坊演技に笑われまくったそうです。何度も監督からダメ出しを食らったそうです。相当なコンプレックスを抱えていたと思います。

しかしそこから健さんの内的世界の旅は始まり、自分の中の義理と人情を常に内観し、苦悩しながら生きていくうちに、次第に俳優高倉健と人間高倉健が自然体で一致し始め、最期は後光のさすような自然な笑顔を獲得されました。天竺から経典を持ち帰ったのだと思います。



誰の心にも孫悟空や猪八戒や沙悟浄はいる。それを強く意識すればするほどコンプレックスは深くなる。でもそれゆえに旅路の理由が芽生えるともいえる。

「短所は時に行き過ぎた長所を創りだす。そしてそれは時に大化けする。だれにもまねできない圧倒的な世界(コアコンピタンス)を創りだす。」

俳優高倉健さんはそのことをまざまざと思い知らせてくれるお手本を生きてくださいました。ご冥福をお祈り申し上げます。

「ありのままの～とは？」とか、「日本人らしいサッカーとは？」というマインドトークが何度も頭の中を駆け巡って堂々巡りした2014年でしたが、高倉健さんに

「日本人よ、迷わずこの道を行け！」

と後押しされた様な気がして、頭の中の無駄なおしゃべりが止まった日本人も多いのではないかと思う2014年年末です。未来は明るい！！

感謝！ 羽原篤史

